

ま え が き

茲に本校の『高校教育研究』第十号を刊行する運びとなったことは誠によろこびにたえない次第である。

附属高校が他の高校とその性格を異にしている点は、云ふ迄もなく実験学校としての性格であつて、教育実習と高校教育全般に亘つての実践的研究にあると考えられる。

今日迄われわれは微力乍ら、常にこの観点に立つて最善の努力をつづけてきたのであるが、本誌はわれわれ職員の研究の発表機関として既に号を重ねること茲に第十号を迎えるに至つたのである。

今日迄の各号に集録されてきた内容をみるに、一方には担当教科に関する専門的研究と一方には教育技術的研究、例えば教材研究をはじめ生活指導等に関する研究の成果が集録されてきたのである。

本号に於ては、目次に示す如く、教科の学問的研究をはじめ、教科の取扱い方に関する研究、改訂学習指導要領に基く教材の研究、更には又「本校生徒の在学中における学業成績の推移に関する研究」、「高等学校入学試験科目の内容」の研究等の外に、生活指導の面については、本校の生活指導委員会と研究部との共同発表による『ホームルームの運営について』の記載が集録されている。これに於ての『基礎的研究』は既に昨年十月名古屋大学教育学部附属高校に於て開催された全国の附属高校研究協議会に於て発表し、多数の人々の批判を仰いだのであるが、今茲に発表するものはこれ等の基礎的研究の補遺と共に之が実施運営に於てのものである。

以上の外に外国語に於ての記述と昨年の夏季に実施した本校の保健体育行事の記録も集録されており、その内容はかなり多岐に亘つてはいるのであるが、われわれの研究のねらいとする處はあく迄も実践に則した調査研究と教科の学問的研究を中心とするものであつて、之を継続深化しつつ高校教育の成果をあげるべく期待し、努力をつづけているのである。

然しわれわれの調査研究の方法やその考察乃至は実施の上に於ても尚未熟の点が多いことと常におそれているのである。幸に關係各方面の先生方の御叱正と、あたたかい御教示がいただけるならば誠に幸とする所である。

昭和三十四年一月二十二日

校 長 村 上 賢 三